

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

実直な努力家

～人事のスペシャリストを目指して～

昨春、多くの企業・団体と同じく水資源機構もたくさんの新入社員を迎えた。あれから1年。若者たちはどう成長したのだろうか。同期入社の中でも、最も劇的に境遇の変化を感じているのは、はにかんだ笑顔が爽やかな好青年、岩井ではないかと思う。

採用する立場、される立場

少し前まで就活生として採用される立場だった岩井。彼がいま携わるのは職員の採用活動だ。つまり、学生時代とは真逆で学生たちを採用する立場となった。

社会人となって1年足らずだからこそ、学生たちの心境が手に取るようにわかる。

「内定が出るまでは本当に辛かったです。自分が社会から必要とされていないような錯覚をしたほどです。だから、私は学生さんの緊張を解きほぐして、本来の実力を発揮させてあげたいと思っています。」

学生たちへの岩井の優しさがにじみ出る。学生に対する誠実な態度には彼自身の就活時代に感じた思いに理由がある。

「採用担当が会社や仕事を愚痴る光景も目の当たりにしてきました。私はとても失望しました。こういう

Profile

本社人事部門人事課

岩井 智哉 *Iwai Tomoya*

平成28年4月、水資源機構に入社。最初の配属先が現職。

群馬県出身。幼い頃から近所を横切る群馬用水や奥利根の矢木沢ダムなどを見て、ダム・水路に親しみを感じる。映画鑑賞を好み、真冬のダムが舞台となった映画「ホワイトアウト（2000年公開）」は幾度となく観た。いつか米国・フーバーダムを訪れたい。

思いを学生たちにさせるようなことは絶対にしたくない、そう思いました。だから、できる限りポジティブなコミュニケーションを心がけています。」



ぶれない思い

学生たちに真摯に向き合う一方で、決してぶれない思いが岩井にはある。

だから、採用面接の控室で出番を待つ受験生たちに努めて声をかけ、質問に答え、ときに相談に乗ったり、励ましたりもするという。一時の短いコミュニケーションとわかっているが、水資源機構の仕事や雰囲気をリアルに伝えたいと考えるからだ。

「学生さんが働く前に思い描いた水資源機構に対する印象と現実とのギャップをなるべく小さくしたいんです。そのギャップが大きければ大きいほど、仕事を続けられない人も出てくるでしょう。こういうミスマッチはお互いにとって不幸だと思うんです。」

入社して1年も経たない若者が、ここまでしっかりと考えていることに少々驚きもあったが、何だか頼もしい気持ちになった。

先輩の背中を追って

最初の職場、最初の上司。誰しも非常に思い出深い存在となっているのではないだろうか。岩井も例外ではない。

「地元の金融機関から内定をいただきましたが、採用を担当された職員がとても前向きな話をしてくださり印象が良かったので、水資源機構を選びました。」

その採用担当こそが、彼にとって最初の上司でもある。初めての仕事もその上司に教えてもらった。別々の係となり、別々の仕事をする事となった今でも、遠慮しながらも優しくフォローしてくれる頼もしい存在だ。その背中とはとてつもなく大きい。

「いつかは先輩のように成長し、後輩の面倒を見てあげたいです。」

いつか人事のスペシャリストに

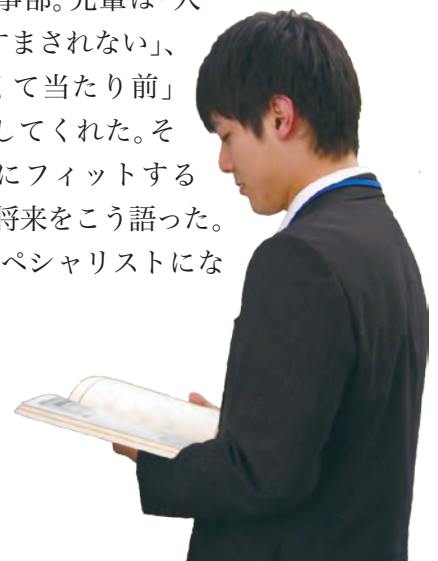
今の自分は一人前に程遠いと岩井は自覚する。そして、人事の仕事はもちろん、総務、財務、用地など幅広い業務を経験したいし、様々な知識を涵養したいと考



える。有言実行、手始めに複数の資格取得に向けた学習を始めた。目標が明白なので、学習自体は苦にならないと言う。

職員やその家族の生活に大きく影響する大事な仕事を預かるのが人事部。先輩は「人事は間違えたではすまされない」、「人事はミスがなくて当たり前」とあえて厳しく諭してくれた。そういう実直さが彼にフィットするのだろうか、自身の将来をこう語った。

「将来は人事のスペシャリストになりたいです。」



料理の腕も磨く。最近、少し高価な調理器具も買い揃えた。これまで実家暮らしで大した料理は作れなかったが、豚汁、ハンバーグ、パスタなどレパートリーも増えた。忙しい日々を送るが、毎日の自炊を欠かさない。昼食も手製のお弁当を持参する。

「自炊は栄養のバランスもとれて健康になるし、いいですね。節約にもなります。」